

---

# IS(インフィニット・ストラトス) 闇に憧れし者

我流 龍騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 闇に憧れし者

### 【Nコード】

N1995Z

### 【作者名】

我流 龍騎士

### 【あらすじ】

織斑 一夏の運命は大きく変わった  
彼は父と言える存在に会う事が出来た  
そして父の力を得て彼はIS学園に向かう

## 父さんのIS

憧れ

俺にとってそれは同時に希望でもあった

憧れにした人に近づきたかった

だけどそれはある出来事から一気に崩れ去った

だけど俺の本当の憧れを知る事にもなった

あの時、俺の運命は大きく変わった

偽者の憧れから真実の憧れへ

俺は・・・最高の人に会うことが出来た

俺が誘拐され、千冬姉が救出に来たはいいが

俺が着ている服が俺を誘拐した連中と同じ服を着された服のせいで  
かまわず攻撃してきて俺の片目の視力は奪われそして俺の片腕がバ  
ツサリと斬られた

俺は声され出す事が出来なかったそのまま俺はのたうち回り

千冬が消えた後生き残った連中に殺されかけたが、俺の運命が変わ  
った

俺を助けてくれたのは全身が黒で統一され頭部は龍のような物だった  
背には黒いが神々しい翼があった、手には日本刀のような物が握ら  
れていた

その龍騎士は俺を殺そうとして連中を斬り倒し、肩から灼熱の炎で  
焼き付くし

相手を焼き倒した

そこで俺は気を失ったが目覚めた時には俺はベットで寝ていた

近くには艶やかな長い金髪に吸い込まれそうな青い目と茶色の瞳を  
した

俺よりかなり年上の人だった

その人は俺を助けてくれた龍騎士という事が解った時は感謝しても仕切れなかった

しかもその人は俺の視力を失った片目を見えるようにしてくれた  
その代わり目の代わりは青色になってしまったがな  
でもその人と同じ色の目でもしる嬉しかった

しかも俺のためにISの技術を応用した義手を製作してくれ  
それに俺のためにリハビリにまで付き合ってくれた

そして俺はISの技術があるから1ヶ月で動かすことが出来た  
で俺に二つの選択種をくれた

日本の家族の元に戻してくれる事と自分の元に置いてくれる事だった  
俺は迷わずこの人の側に居る事を選んだ

そうしたら俺を家族として歓迎してくれた、本当にこの人には感謝  
しても仕切れない

・・・

和食風の朝食を作る

テーブルに作ったご飯を並べコップと箸を並べた

作り終わった所でその人は来た

艶やかな髪を靡かせて・・・

「おはよう、アグリユ」

「あ！おはよう！ディラス父さん！」

父さんつまり俺を助けてくれた龍騎士のフルネームは

ディラス・ザウंगा

そして俺の今の名はアウゲラルスイ・ザウंगा

昔の名は捨てた

アグリユというのは俺の愛称だ

父さんは小さい時に日本で育ったらしく日本食が好きだ

俺と父さんは席に付き朝ご飯を食べ始めた

父さんはいつも俺の作り料理を美味しそうに食べてくれる、嬉しい

限りだ

「「ご馳走様でした」」

食べ終わったら食器を片付け洗い拭き食器棚に入れる  
そして父さんにコーヒー、俺はジュースを飲む

「……で父さん話って……？」

「……お前は今まで何年も俺の手伝いをしてくれた、まあ正確には押し付けていた部分もあつたけどな……」

「いいんだよそんなの……」

俺は父さんの仕事の手伝いとしてISの極秘情報の入手、軍内の情報  
報の入手を任務としていた

仕事の相棒として父さんお手製のIS『デスペア』を使って仕事を  
していた

「お前にこいつを預けようと思う」

父さんはテーブルに小箱を置き俺の前に押し出した

「？開けて良い？」

「ああ」

俺は小箱を開けた

そこには黒く龍と剣とライフルが装飾されたガントレット  
父さんが俺を助けてくれた時に使ったIS

『<sup>ヘル・ドラグーン</sup>地獄の龍騎士』だった

「!!!父さん！これって……」

「・・・お前には『地獄の龍騎士』<sup>ヘル・ドラグーン</sup>を受け取る資格がある  
これからお前はIS学園に行く事になってる・・・不本意だと思う  
がそこでじっくり  
力を付けてくれ、まあお前の力は世界に通じるがな」  
「父さん・・・！！解った！！」  
「ふふふ・・・」

父さんは俺の頭を撫でてくれた

「俺とも直ぐに会えるからな」  
「うん！！」

## 主人公設定

織斑 一夏 アウグラルスイ・ザウंगा

年齢 17

身長 180cm

体重 75?

使用IS 『デスペア』 『地獄の龍騎士』

今作の主人公

自らが誘拐された時に千冬の手によって片目の視力は奪われ、片腕を失った

そして『地獄の龍騎士』<sup>ヘル・ドラグーン</sup>の性能テストで来ていたディラス・ザウंगाによって

助けられ片目の視力と片腕を取り戻す、ディラスの家族として迎えられ

名をアウグラルスイ・ザウंगाと変え、昔の名は捨てた相棒としてディラスのIS『地獄の龍騎士』を受け継ぐ

## 希望の龍騎士

俺の名はアウグラルスイ・ザウンガ

少し前までは世界各地でISの極秘情報の入手、軍内の情報の入手を任務として行動していた

俺はそんな事をしていたためか、俺は幾つかの異名をとった

『漆黒の処刑人』 『絶望よりいでし亡霊』 とか色んな物がある

希望という名を持つ俺が絶望デスベアを操るとは・・・

父さんもそう言った

『希望の名を持つものにな、皮肉な事になったなホープにすればよかったかな？』

でも希望より絶望の方が良い

俺が何年間も人生共にしてきた目と腕を奪った奴に・・・絶望を与える事・・・

そのために・・・父さんに頭を下げて俺は訓練を重ねて俺は国家代表さえ倒せるレベルにこれた

父さんには敵わないけど・・・父さんは生身でもISを完全に破壊ができるほどの実力者

人外って言ったら父さん凹んじやったよ・・・気にしてるみたいで・・・

まあそれはさて置き・・・俺は今・・・

「ではSHRを始めますそれでは皆さん1年間宜しくお願いします」  
「」「」「」「」

先生が挨拶をするが皆無視



「え〜つと・・・では自己紹介をお願いします・・・」

涙目になってる・・・俺はIS学園の教室にいる

そして俺の姿は昔に比べかなり大きな変化を遂げている

父さんに頼んで俺の姿を変えてもらった、髪は父さんと同じ金、顔も父さんの顔に近づけて貰った

本当の息子みたいに・・・

「ア・・・アウゲラルスイ・ザウンガ君！あの自己紹介の番なんですけど・・・」

「はい・・・アウゲラルスイ・ザウンガ・・・」

「・・・（キラキラ）」

周りは何かを望んでいるかのような目をしている

「・・・以上だ」

ガタッ！！

何人かの女子が席から落ちた

「え〜と・・・以上ですか？」

「ああ・・・俺には名以外に誇る物は父しかない・・・」

俺はそう言っつて席に着いた

が何かが後ろから攻撃してくる気配を感じた

ガスッ！！俺は片手でその攻撃を防いだ

「まとも自己紹介もできんか、馬鹿者が」

「・・・俺は俺が言える事を充分に言っつた・・・」

出席簿を跳ね除け俺は『地獄の龍騎士』に触れた  
地獄の龍騎士を触ると父さんの温もりを感じられる  
こいつ・・・嫌・・・もう少し・・・父さんが来てからだ  
俺はSHRが終わるのをただ待った・・・  
そして休み時間・・・  
周りを見る俺への視線は珍しい物を眺めるような目だ  
すると一人の女が来た

「ちよつといいか？」

すると一人の女子が話しかけてきた

「・・・篠ノ之 篝・・・」

「ああ・・・少し・・・聞きたい事がある・・・」

「・・・用件による・・・」

「ここでは話せん・・・着いてきてくれ・・・」

「・・・」

俺は立ち上がり篠ノ之 篝の後に続き屋上に向かった、俺は屋上の  
柵に身を任せている

「・・・何だ・・・聞きたい事とは・・・」

「・・・織斑 一夏という者を知らないか？お前と似た感じの奴な  
んだが・・・」

「・・・やはりそれか・・・篝・・・」

「・・・名前から察するに織斑 千冬の関係者か・・・知らん事も  
ない・・・」

「本当か!!!？教えてくれ!!!一夏は私の！友達なんだ!!!」



「~~~~ツ!!!!!!?? / / / / / / / / / / / /  
「再会の記念だ」

筭は真っ赤になって走って行った

「……?何かしたか?俺?」

## イギリスの代表候補生

授業がスタートしたが2時間目が終了した所で

「ちよつとよろしくて？」

髪がロールヘアーの女の子が話しかけてきた

「ん？」

「まあ！なんですよ！そのお返事は？」

私に話しかけられるだけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

女尊男卑の影響を受けた女か・・・

「イギリスの代表候補生セシリア・オルコット」

「あら私の事を知っているのですね？」

「・・・興味は無いがな・・・エリートだとい事は聞いている」

「そうですね！エリートですわ！貴方とは違う入試試験で唯一教官を倒したエリートなのです！！」

「教官なら俺も撃破した」

「え！？」

セシリアは声を上げた

「私だけと聞きましたか？」

「女子だけということだろう・・・」

ピシッ

セシリアの額に何かが走った、その時チャイムが鳴った

「くっ！覚えてらっしやい！！」

セシリアは自分の席に戻っていた

「二度と来るな・・・」

そして授業スタートクラス代表を決めるはずだったんですが  
女子が推薦したのは俺

それに異論を唱えたのはセシリア・オルコットだった

「このような選出など認める訳にはいきません！

男がクラス代表者だなんていい恥曝しですわ！

私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえ  
とおっしゃるのですか！？」

耳が痛いな・・・

「文化的に後進的な国で暮らす事自体が私にとっては耐え難いです  
わ」

「ならさっさ国に帰れ、愚女が」

俺の言葉はクラス全員の視線を俺に集める

「貴様はその文化的に後進的な国の発明者が作り上げた物の国家代  
表生だろうが

こんな奴が代表とは・・・国のレベルが知れるという物だ・・・」

「祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱してきたのは貴様だ・・・」

「くっ！！貴方には相手を敬うという事を知らないのですか！？」

貴方の誇る父の人が知れますね」

「・・・こいつ・・・今なんて言いやがった・・・？父さんを侮辱しただと・・・」

「おい・・・今なんて言った・・・」

「聞こえませんでしたの？なら改めて言って差し上げますわ  
貴方の誇る父の人が知れますね」と言ったのですわ！！」

ゾワァ！！！！

その瞬間アグリユを中心に風が巻き起こった

殺気と怒りが教室を包み込む

泣き出してしまふ者もいるほど

「・・・父さんを侮辱するなよ・・・父さんは俺の命を救ってくれた・・・」

俺の腕を・・・目を使い物になるようにしてくれた・・・」

アグリユは服を捲り銀と黒に輝く義手を見せた

「そ、その腕は・・・」

セシリアは殺気に飲まれ少し引きながら尋ねる

「・・・お前に答える義理は無い・・・お前が俺をどれだけ侮辱しようが

殴ろうが蹴ろうが殺そうが構わん・・・だがな・・・俺の誇りである父さんを侮辱することは許さん！！」

「そ、それ程の誇りを持っていらっしやるのだったらクラス代表の座をかけて決闘ですわ！！」

「決闘か・・・いいだろう・・・地獄を見せてやる」

その時義手が一際大きい光を放った



地獄の龍騎士 単一使用能力(ワンオフ・アビリティ)

俺は放課後教室であのウザったい愚女を血祭りにする計画を考えていると・・・

「ああ！良かった・・・まだ此所に居ましたか・・・」

「山田先生・・・なんですか・・・」

「アウグラルスイ・ザウンガ君の部屋が決定しました」

「・・・長いから・・・アグリユで・・・1週間は自宅登校・・・」

「いえ・・・事態が事態ですから・・・」

「・・・荷物取りに行く・・・」

俺は席を立ち上がった時、千冬が居た

「家に帰る必要はない、お前の父に連絡しお前の荷物を持ってきて貰った

今は校門前で待ってもらっている」

「・・・了解・・・」

俺は早足で教室を出た、後ろから二人の先生が追いかけてくる

昇降口から出て校門前にいる父さんを見つければ寄った

「父さん！」

満面の笑みでディラスに駆け寄った、まるで逸れて離ればなれになっていた犬のように

高校生がこんな姿でいいのか？先生二人は授業中と先程の姿とはかけ離れた姿に戸惑うが、ディラスは両手でアグリユの頬を引っ張る

「いひゃい、いひゃいででふえすとつふあん」  
「当たり前だ痛くしているんだ」

頬を3cmぐらいを引っ張る父さん、マジで痛いです・・・泣きそ  
う・・・

真顔で引っ張らないで・・・

「何教室で殺気だしとんだ・・・」

「ごめんなしやい・・・」

「解ればよろしい」

そう言っつてようやく離してくれた  
っつてか俺の頬っつて何？ゴム質？

「ほらお前の荷物だ」

俺に放つてきたのは大きめのバツク  
しかも父さんが始めて買っつてくれた思い出の品

「有難う」

満面の笑み全開でデイラストにニヤッ　っつて感じで抱きつく

「何か・・・安心しました」

半ば忘れられていた山田先生が声をあげる

「何がだ？山田先生？」

「なんかアグリ君っつて誰も寄せ付けないで、誰に対しても冷たく  
当たるっつてイメージだったんですけど

あのお父様のやりとりを見て安心しました、やっぱり年頃の男の子だなんて」

「・・・それにしても・・・ディラスさんはいくつなんだ？アウグラルスイが15か16だとして  
若すぎないか？」

確かにISを素手で破壊する人外は見た目も人外である、艶やかな長い金髪に吸い込まれそうな青い目と茶色の瞳

身長もかなり高い、見た感じでは190はあり、実年齢は26だが若々しい見た目からまだ

十代後半（18）に見える、兄と弟に見える・・・美少年と美青年の兄弟と言ったところだろう

気づくとディラスはバイクに股がり去って行った

アグリユは笑顔でニコニコしながら山田先生に部屋番号を聞き機嫌良さそうに歩いて行った

（山田先生と話す時にはいつもの絶対零度の目と無表情の顔だった）

・・・・・・・・・・・・・・・・

機嫌良さそうに自らの部屋番号を探しながら廊下を歩く

・・・あっさりと見つかった、アツサリめの塩ラーメンよりアツサリしている

例えが可笑しいだろ・・・

アグリユは誰かと同室だと困るからバツクを床に置き、ノックするすると誰かがドアを開けた

「同室になった人か、短い間だが頼むぞ」

そこには湯気を纏いタオルを羽織っている俺の幼なじみ、篠ノ之 篤  
お互いに時が止まった・・・色んな意味で・・・

「(くるりッ)」

後ろを向くアグリユ

「・・・服を着る・・・」

「・・・！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

それから箒は急いで服を着た、アグリユは着替え終わるまで後ろ向いていた

そして着替え終わった所でアグリユはやつと部屋に入る事ができた  
そしてクラス代表戦の日がやって来た

地獄の龍騎士を展開しようとして時に先生が駆け込んできた

「大変ですよ！アグリユ君！！貴方のISが急にシステムダウンをおこして使えなくなっていました！」

「ええ！？ではアグリユはどうすれば！！？」

「・・・問題ない・・・」

「  
」「え？」「  
」

先生二人、箒の声が重なった

俺は義手とは逆の腕につけた黒く龍と剣とライフルが装飾されたガントレットを見せた

「なんですか・・・そのガントレットは・・・？」

「・・・龍・・・」

構わず地獄の龍騎士を展開した、全身が白で統一され頭部は龍のよ  
うな物、背には白く神々しい翼がある

・・・あれ？

「・・・何か違う・・・」

フルスキン  
「全身装甲!？」

「見たことのないISです!!」

「・・・箒・・・」

「な、なんだ？」

先生お二人方をアツサリと華麗にスルーし箒に話しかける

「勝ってくる」

「!!!・・・ああ勝ってこい!!」

翼を広げ飛びにセシリアがスタンバっていた所に向かった

「あら逃げたのかと思いましたがわって全身装甲!？」  
フルスキン

「・・・始めるぞ」

そして試合は始まった、セシリアはライフルで俺を捉えようとする  
ギリギリで避けつつける、・・・反応が遅すぎる・・・これが父さ  
んが言ってた

フォーマットとフィッティングの状態、白いのは完全に力を出せな  
い状態・・・

「私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい!!」

ビットのようなものを放ってくる、ハエみたいでウザイ・・・翼を  
大きく広げ超低空飛行で回避する

『にしてもスゲーな、本来の10%も出せないのにな』

『流石はディラス様のご子息ですね』

『間もなく私達の出番来ますかね?』

『そうじゃあないか？そろそろ一次移行終わるし』  
『・・・ディラス様もいいけど・・・この子もいい・・・』

・・・そして地獄の龍騎士は闇に包まれた  
白かった全身と翼は黒で統一され背には神々しいを残した黒い翼が  
あった

「ま、まさか一次移行！？初期設定であそこまで戦っていましたの  
！？」  
「？」

する時が止まったように世界が灰色に染まった

そして俺の目の前に人間の世界ではない馬鹿に大きい龍？がいる  
しかも大量に・・・

俺がまだ父さんの家族に成り立ての頃に父さんが俺に見せてくれた  
絵に書いた龍達にそっくりだった・・・

『・・・貴方がアウグラルスイ・ザウンガだな？』

「・・・そう・・・」

『俺達はこのIS、地獄の龍騎士の単一使用能力の鍵だ』  
ワンオフ・アビリティ

「・・・父さんの知り合い？」

『そうだあ！！俺達は元々貴方の父上様！ディラス様の仲間だ！！』

『とにかくよろしくお願いね、単一使用能力を使う時は私達の誰か  
を呼んでね、力貸すから』

「・・・了解・・・じゃあ・・・銀の龍・・・お願い・・・」

『了解いたしました、私はリオレウス希少種のシルレウです』

「・・・お願い・・・」

『畏まりました』

するとシルレウ以外は消えてシルレウは俺と一体化した

頭部にはシルレウの頭部を象った形に変わり肩には二つの龍の頭が

装備された

そして世界に色が戻った

「ななななんですか！？装備が変わった！？」

「・・・終われ・・・」

肩の龍が咆哮をあげ、肩から銀色が混じった炎が発射された『死の  
業火』デス・ボルケーノ

死の業火はセシリアとビットを飲み込み焼き尽くした

そして・・・たった一撃で・・・

試合終了勝者 アウグラルスイ・ザウンガ

アグリユは戦いが終わったらつまらなそうにアリーナを後にした

## 龍と父さん

アグリユは一旦屋上に出て屋上に寝そべった、考えるのは自分の心の大半を占める父との思い出

アグリユ・・・嫌、一夏は親からの愛という物を知らなかった

それ故にディラスの優しさに心酔した、それ優しさを答えるために一夏は我が儘なんて一つも言わなかった

そして家事や家の仕事、父の仕事の手伝いを積極的に行った

父ディラスは一夏にとって憧れである闇、その物を持っていた、嫌ディラスの持つ闇のような姿に憧れた

優しい闇、強大な力の闇、暖かい闇、俺はそんな闇に憧れた、俺は父さんのような闇を持ちたかった・・・

持てるかな・・・？・・・父さん・・・

その時地獄の龍騎士が光り輝き銀色の執事服に身を包んだ銀髪の子ケメンと

金のスーツに身を包んだ金髪の綺麗な女性、そして黒いスーツを着た短い黒髪のイケメンが出て来た

「・・・アンタらは・・・？」

「私は先程龍の姿にてお会い致しましたリオレウス希少種のシルレウです」

「・・・シルレウ・・・？」

「私は『とにかくよろしくお願いね、単一使用能力を使う時は私達の誰かを呼んでね、力貸すから』

って言ったりオレイア希少種のアルレイよ」

「・・・アルレイ・・・」

「おりゃ『そうだあ！！俺達は元々貴方の父上様！ディラス様の仲間だ！！』」

って言ったティガレックス亜種のブラクスだ！よろしくな！」



「ブラクス・・・亜種に希少種って事は亜種や希少種じゃないの  
いるのか・・・？」

疑問に思った事を聞いてみる

「普通はそうだがな生き残ったのは俺達だけだ・・・昔はもっと居  
たんだがな・・・」

俺達龍は地球最後して最古の秘境・・・ロスト・エリアにいた・・・  
そこは本来人間が認識する事は

できないように人間の世界とは別の空間にある・・・そこで大規模  
な地殻変動が起きたんだ・・・

そこで沢山の仲間が死んだ・・・俺達も瀕死の傷を負った・・・伝  
説と言われる龍も

古代の強大な力を持った龍、古龍も、俺を含めた亜種も・・・  
そこに現れたのがデイラス様が現れたんだ・・・俺達を恐れる事な  
く俺達の瀕死の傷を治療してくれた・・・

「そう・・・デイラス様は不眠不休で私達の命を延命させるために  
尽くしてくれました・・・」

ですが我々の命はデイラス様一人の治療では間に合いませんでした。  
・・・」

「そして私達の命が尽きそうな時に私達の命は地獄の龍騎士の一部  
としてデイラス様は生かしてくれたの  
そして私は新たな命を得たの・・・」

皆が話した信じられないような話  
ん？

「・・・父さんって何者・・・？」

「デイラス様は元々科学者なの」

「科学者・・・？」

「ディラス様は電子、遺伝子学の世界的な権威なのですって言うって  
も表舞台には一切姿を表さず

代理人を立てて発表をしていたようです・・・そのため素性は一切  
謎という事らしいのです」

「まったく我らが主人ながら凄まじい方だ、おっと誰か来たようだ」

「では私達はこれで」

「じゃあね」

3人は地獄の龍騎士に戻って行った、そして屋上のドアが開き誰か  
が来た

来たのはセシリア・オルコットだった

「・・・」

「・・・」

沈黙・・・重い空気が屋上を包み込む

その沈黙を破ったのは・・・

「・・・あの・・・」

セシリア・オルコットだった

「・・・」

「す、すみませんでした!!」

セシリアは大きく頭を下げた

「・・・何のつもり・・・？」

「私は・・・あの戦いの後よく考えたんです・・・申し訳ありません

んでした！

貴方のお父様を・・・侮辱するようなことを言ってしまうて！

「・・・いいよ・・・俺も言い過ぎたようだ・・・悪いが昔話に付き合ってくれ」

「あ、はい」

セシリアはアグリユが寝そべっている近くに座った

「俺と父さんは本当の親子じゃないんだ・・・」

「ええ！！？」

「俺は死にかけた時に父さんに助けられて、父さんはこの義手と片目を見えるようにしてくれたんだ」

それに俺は親の愛情って物を知らなかった・・・」

「え！？じゃ、じゃあ！」

「俺は昔親に捨てられたんだ・・・父さんはそんな俺を本当の家族してくれて愛情を注いでくれたんだ・・・」

俺は嬉しくてな、そんな父さんは俺の誇りであり憧れになったんだ・・・俺の・・・

敬愛する父さんなんだ・・・」

「そ、そんな・・・私は・・・私は・・・」

「嫌もういい謝ってくれた・・・頼みがある・・・俺と友達になつてくれないか？」

「え！？もちろんです！！」

「そうか」

アグリユは体を起こし手を差し伸べた

「俺の事はアグリユでいい」

「私はセシリアで結構です」

俺達は握手をした

その時セシリアの顔は赤くなっていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1995z/>

---

IS(インフィニット・ストラトス) 闇に憧れし者

2011年12月9日02時45分発行